

奄美諸島のさとうきび生産と製糖業

基礎研究部 副部長 清水徹朗

1 はじめに

昨年10月に、野田首相は日本がTPP参加に向けた事前協議を開始することを表明したが、TPPへの参加は日本農業に甚大な影響を及ぼす可能性が高い。TPPの影響は米のみならず小麦、乳製品、砂糖、でんぷんなど多くの農業部門にわたるものであり、TPPが日本農業にどのような影響を与えるかについては個別品目ごとに検討を行う必要があるが、本稿では、このうち砂糖原料生産地域として重要な奄美諸島のさとうきび生産と製糖業について紹介する。

2 日本の砂糖原料生産と砂糖制度

日本では、北海道(てんさい)と沖縄県・鹿児島県(さとうきび)で砂糖原料作物を生産しており、国産原料による砂糖生産量は655千トンで、砂糖需要量全体(2,107千トン)の3割を占めている(10年度)。国産砂糖のうちてん菜糖(北海道)が490千トン、甘しゅ糖(沖縄、鹿児島)^(注)が156千トン、含みつ糖が9千トンで、てん菜糖の占める割合が高い。また、日本の砂糖(粗糖)の主な輸入先は、タイ(517千トン)、豪州(490千トン)、南アフリカ(102千トン)である。

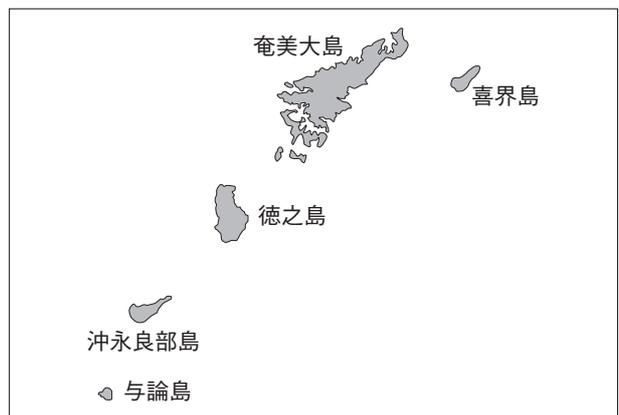
国産原料で砂糖を製造するとコストが高くなるため、日本は国境措置と助成金によって国内での砂糖生産を維持している。日本は精製糖の関税率を高く設定しているため精製糖での輸入はほとんどなく、粗糖の輸入に対して調整金を徴収し、それを財源として生産者・製糖工場に交付金(甘味資源作物交付金、国内産糖交付金)を支給し、砂糖の安定供給を実現している。

3 奄美諸島の農業の概況

奄美諸島(奄美群島)は、奄美大島、徳之島、沖永良部島、喜界島、与論島などからなり、鹿児島県に属しているが、奄美市(奄美大島)は鹿児島市から370km、那覇市から300kmの距離にあり沖縄県に近く、特に与論島は沖縄本島から25kmしか離れていない。

奄美諸島全体の面積は1,231km²、人口は12万人で、人口減少が続いてきたが、近年は減少率が減速している。奄美諸島のうち面積、人口とも奄美大島が最大であり(面積で66%、人口で56%を占める)、奄美大島は沖縄本島、佐渡島に次ぐ大きな島である。しかし、奄美大島は山地が多く平坦な土地が少ないため耕地面積は2,180ha(耕地率2.7%)に過ぎず、徳之島(6,890ha)や沖永良部島(4,480ha)のほうが耕地面積が大きい。

奄美諸島は南国のリゾート地としてよく知られているが、住民の多くは農業に従事しており、農業は島の経済にとって重要な産業になっている。奄美諸島の農業生産額は294億円であり、このうちさとうきび(94億円)が最大で32%を占め、次いで野菜77億円(うちばれいしょ49億円)、花き50億円、肉牛47億円である。



米はほとんど作っていない。島別に見ると、沖永良部島(113億円)と徳之島(108億円)の2島で75%を占め、奄美大島は28億円、喜界島26億円、与論島20億円である。

奄美諸島の農家戸数は8,149戸(2010年)であり、2000年に比べると16.9%減少している。耕地面積は16,900haであり、1戸当たりの平均耕地面積は2.1haで都府県の平均より大きい。

4 奄美諸島のさとうきび生産

鹿児島県全体のさとうきび生産量は648千トン(うち奄美諸島450千トン、種子島198千トン)であり、沖縄県(820千トン)の8割程度である(10年産)。奄美諸島のさとうきび生産量は89年には704千トンであったが、生産者の高齢化等により05年には345千トンまで減少した。そのため農林水産省と鹿児島県は05年に「さとうきび増産プロジェクト」を立ち上げ、その後生産量は回復してきている。島別に見ると、徳之島が220千トンで奄美諸島の5割を占め、次いで喜界島(88千トン)、沖永良部島(80千トン)、奄美大島(33千トン)、与論島(29千トン)である。

さとうきび農家の数は、70年は18,434戸、90年は10,871戸あったが、2010年には6,850戸に減少している。一方、さとうきびの収穫面積は、70年9,250ha、90年9,426ha、2010年7,716haと農家戸数ほど減少していないため、1戸当たりの平均収穫面積は70年0.5ha、90年0.9ha、2010年1.1haと徐々に増大している。1戸当たりのさとうきび生産額は137万円であり、さとうきびによって得られる1戸当たり平均所得は年間43万円である。

さとうきびの収穫作業は、かつては手作業での重労働であったが、近年急速に機械化が



さとうきび畑(徳之島)

進んでおり、機械収穫の割合は93年ではわずか7.5%であったが、98年に32.9%になり、2010年では82.5%に上昇している。さとうきびの栽培方法には、春植(2-4月に植え、翌年の3-4月に収穫)、夏植(8-10月に植え、1年半後の冬に収穫)、株出(収穫後の株から出た芽を育て1年後に収穫)の3つがあるが、奄美諸島では株出が収穫面積の6割を占めている。

5 徳之島におけるさとうきび生産と製糖業

徳之島の面積は奄美大島の3割程度であるが、平地が多いため耕地面積は奄美大島の3倍である。徳之島は闘牛で有名であるが、農業が盛んであり、奄美諸島のなかでさとうきびの生産量が最も多い島である(生産額45億円)。また、ばれいしょ(24億円)、肉用牛(22億円)の生産額も大きく、近年ではかぼちゃやマンゴーが大きく伸びている。

奄美諸島で生産されたさとうきびは、島ごとに立地している製糖工場で加工・抽出され分みつ糖として島外に出荷される。徳之島では南西糖業(株)が伊仙工場と徳和瀬工場の2工場年間27千トンの分みつ糖を製造している。砂糖産業にはさとうきび生産農家のみならず加工、流通、黒糖製造など多くの企業が関わっており、砂糖産業は徳之島の経済、雇用にとって不可欠の産業になっている。

(しみず てつろう)

(注)含みつ糖とは、さとうきびの搾り汁を煮詰め固めたもの(黒糖)であり、含みつ糖から糖蜜を分離したものが分みつ糖である。